

令和3年度 第1回 浜松市美術館協議会

日 時 令和3年8月19日（木）
午後2時から午後4時まで
場 所 浜松市美術館 2階 講座室

次 第

- 1 開 会
- 2 浜松市美術館協議会委員委嘱書・任命書交付
- 3 浜松市市民部文化振興担当部長あいさつ
- 4 浜松市美術館長あいさつ
- 5 美術館協議会新委員自己紹介
- 6 美術館職員紹介
- 7 議 題
 - (1) 会長の選出について
 - (2) 会長職務代理者の指名について
 - (3) 令和2年度浜松市美術館事業報告について
 - (4) 令和2年度浜松市秋野不矩美術館事業報告について
 - (5) 内部評価について
- 8 閉 会

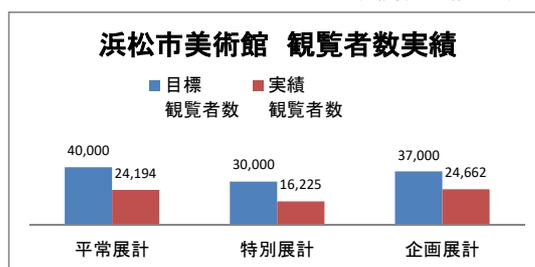
浜松市美術館協議会委員名簿

No.	選出区分	氏名	経歴等
1	学識経験者	ヤマグチ 剛 山口 剛	浜松美術協会理事 日本工芸会会員 静岡文化芸術大学非常勤講師
2	学識経験者	タカ 中 裕二 田中 裕二	静岡文化芸術大学文化政策学部准教授
3	学識経験者	アオキ 明子 青木 明子	アートプランナー
4	学識経験者	ウチダ いずみ 内田 いずみ	元浜松市教育研究会美術科研究部顧問校長
5	社会教育関係者	イバ 啓次 磯部 啓次	浜北文化協会副会長
6	社会教育関係者	ツルタ マサユキ 鶴田 雅之	浜松楽器博物館館長
7	学校教育関係者	イクマ シュウ 生熊 周	浜松市立飯田小学校長 浜松市教育研究会図画工作科研究部顧問校長
8	学校教育関係者	イトウ レイコ 伊藤 玲子	浜松市立光明幼稚園長 浜松市立幼稚園長会会長

令和2年度 浜松市美術館 展覧会開催状況

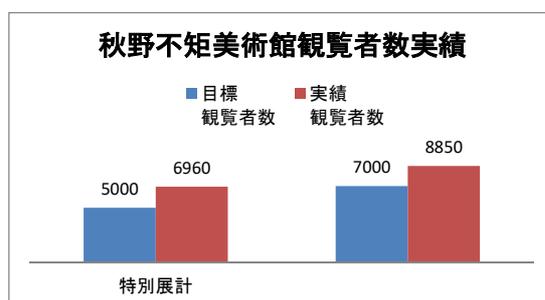
		会 期	開催 日数	目標 観覧者数	実績 観覧者数	1日 平均	備考
平常展	はままつゆかりの収蔵品展	R2. 7. 11～9. 13	61	30,000	16,225	266.0	パディントン 展同時開催
	館蔵品展	R2. 11. 24～12. 20	24	5,000	1,825	76.0	
	第68回市展	R3. 2. 2～2. 12	10	5,000	6,144	614.4	
平常展計			34	40,000	24,194		
特別展	くまのパディントン展	R2. 7. 11～9. 13	61	30,000	16,225	266.0	
特別展計			61	30,000	16,225		
企画展	仲山計介展	R2. 5. 19～6. 14 (4. 25～)	24	7,000	1,915	79.8	
	国芳から芳年へ展	R2. 9. 26～11. 8	38	30,000	19,179	504.7	
	みほとけのキセキ展	R3. 3. 25～3. 31 (～4. 25)	6 (28)	3,200 (15,000)	3,568 (23,069)	594.7	
企画展計			68	37,000	24,662		
合計			163	107,000	65,081		

※同時開催分は日数から除く



令和2年度 秋野不矩美術館 展覧会開催状況

展覧会の名称		会 期	開催 日数	目標 観覧者数	実績 観覧者数	1日 平均	備考
特別展	佐藤美術館コレクション 花と緑の日本画展	R2. 7. 4～ 8. 23	45	5,000	6,960	154.7	
特別展計			45	5,000	6,960		
所蔵品展	秋野不矩 色ふる筆の跡Ⅰ ～動と静の群緑～	R2. 8. 29～10. 18	44	7,000	3,506	79.7	
	秋野不矩 色ふる筆の跡Ⅱ ～安らかな黒白～	R2. 11. 10～12. 13	30		2,219	74.0	
	秋野不矩色ふる筆の跡Ⅲ ～純潔の赤～	R2. 12. 19～R3. 2. 14	44		1,507	34.3	
	秋野不矩色ふる筆の跡Ⅳ ～黄金の街 インド～	R3. 3. 2～ 3. 21	18		1,618	89.9	
所蔵品展計			136	7,000	8,850		
合計			181	12,000	15,810		



令和2年度 浜松市美術館内部評価

年間の基本コンセプト	総 評
令和2年度は、2020東京オリンピックの開催年であるため、「JAPN」をテーマとした企画を構成した。日本文化を紹介するコンセプトで、日本画家である「仲山計介」氏と、江戸時代に人気を博した「浮世絵」(国芳から芳年へ)、さらに遠州・三河地域の優れた仏像(令和3年度の評価対象とする)を紹介した。また、夏季には、広い客層を想定した「くまのパディントン展」を開催し、日本文化と海外の文化が比較できるような構成とした。	令和2年度は、コロナ感染症の猛威にさらされ、4月よりしばらくの間は、閉館を余儀なくされた。しかし、幸いなことに「仲山計介展」は、後半より開館が可能となったため、開館日数は少なくなりましたが、日本画の新しい方向性の発信ができたことは幸いであった。夏季の「くまのパディントン展」では、前半は非常に入館者も多く、好調なスタートを切ったが、残念なことに浜松市の飲食店にてコロナ感染症のクラスターが発見され、街中から人影も消えてしまい、期待していた入館者数を大幅に下回ってしまった。一方、秋に開催した「国芳から芳年へ」は、大変な賑わいを見せ、多くのお客様から満足の声をお聞きすることができた。多くの美術ファンが、入館いただいたこともあるが、この企画は浮世絵の中でも一種独特な表現作品が多いため、過去にあまり目にしたことのない作品群ということもあり、お客様の興味を引く要因だったと感じている。令和2年度は、オリンピックもあり、インバウンドの増加を想定した年間構成ではあったが、海外からの観光客が無くなってしまい、ある意味日本人にとっての日本文化を考え直す良い機会になったような年度であった。

①展覧会について

優れた美術を鑑賞できる展覧会を開催し、来館者の裾野を広げます。

	展覧会名	開催日数(日) 目標(人)	平均(人/日) 実績(人)	達成率	成果	改善点
平常展の開催について	はままつゆかりの収蔵品展 R2.7.11～9.13	61 30,000	266 16,225	54%	<ul style="list-style-type: none"> ・現浜北区出身の画家、山下青厓の作品10点を展示し、郷土ゆかりの作家を紹介すると共に、伝統的な花鳥画の魅力伝えた。 ・パディントン展に訪れた方(特に子どもたち)を対象に、分野の異なる美術(日本画)に触れる機会を提供し、美術の普及に努めた。 ・テーマを「夏の風物」と設定し、魚や蝉、蟹といった身近な題材を使用した絵を選定したことで、日本画に対して変に難しく捉え身構えることのないよう、親しみやすい印象を与えた。 ・軸ケースに展示することで、間近で筆致や色遣いを感じながら鑑賞して頂くことができた。 	第三展示室は、建物の構造上最も奥にある為、気付かないお客様がしばしばみられた。分かりやすい導線表示と積極的なアナウンスが必要であった。
	館蔵品展 R2.11.24～12.20	24 5,000	76 1,825	37%	<ul style="list-style-type: none"> ・「大画面にみる洋画展」と題して、東海地方ゆかりの現代作家による大画面の洋画を紹介すると共に、全国各地での展示を経て久々の公開となる岸田劉生《草と赤土の道》や、新収蔵作品を紹介した。 ・これまで数多くご要望を頂いていた洋画の大作を紹介し、市民のニーズに応えると共に、新収蔵品を同時に公開することで、地域ゆかりの作家の紹介をした。 ・一階展示室を大胆に使用した展示方法(既存の四隅の壁のみを使用)は、大画面作品の迫力を活かすと共に、コロナ対策を踏まえた画期的な展示方法であった。 ・昨年度の市展大賞受賞者を対象にした個展を同時に開催することで、地域で活躍する現代作家の作品を周知できた。 	一部の作品を除き大部分の作品は、作家を紹介するに留まってしまった。今後は、作品研究を重視した解説の準備に注力していきたい。
	第68回市展 R3.2.2～2.12	10 5,000	614 6,144	123%	<ul style="list-style-type: none"> ・「ご案内」という形で前回の入賞者に応募要項を送付したことにより、応募者数に増加が見られた。(273→315) ・例年応募が少ない書道部門の応募規定を変える(「半切以上」と明記した)ことによって応募が増加した。(13→23) ・受付業務は例年どおり搬入者に待たせることなく円滑に実施出来た。 ・受付当日は受付係・PC入力係と業務を分担することにより効率よく出来た。 ・新型コロナウイルス感染症のため表彰式は中止とし、表彰状・記念品は個別対応とした。 ・従前、大賞受賞者には個展を開く機会を与えていたが、人によっては個展を開くほどの点数を持ち合わせていない人もいる。そのため個展という形ではなく、受賞した作品を次年度の展覧会「遠州の民藝展」の開催期間中、通路のピクチャーレールを活用して来館者に披露した。そのためより多くの人に作品を見てもらうことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・入賞者には次回以降も引き続き応募してもらうよう声掛けをしていきたい。 ・搬入受付から審査・開催まで日程が短くなり詰まっていたため、目録の作成に大変苦慮した。目録の校正等は時間を要するため、余裕をもってスケジュールを組みたい。
特別展の開催について	くまのパディントン展 R2.7.11～9.13	61 30,000	266 16,225	54%	<ul style="list-style-type: none"> ・夏休み、お盆の時期に広く市民の方に喜ばれる展覧会としての開催できたと感じる。300点以上を越える作品を展示することにより「くまのパディントン」だけでなく児童文学としての側面も市民の方に紹介できたと感じる。 ・また、新型コロナウイルスの影響がある中で、市民の方に楽しんでもらうイベントとして、くまのパディントンとの撮影会や文字探しゲーム、SNS投稿キャンペーンなどを実施して楽しんでもらうことができた。 ・撮影会では、先着制にして人数を限定すること1日2回という回数を増やして、密集をさけ、尚且つイベントに参加できる人数を増やすことでお客様の満足度を上げることができた。文字探しとSNS投稿は対象を子どもと大人に分け、子ども単体、大人単体で参加できるようにしてイベントにおける密集、密接を回避することができた。 ・感染症対策の中でできることは限られた展覧会ではあったが老若男女問わず多くのお客様が楽しむことができた。 	本展は、新型コロナウイルスと共存しながら行う展覧会の初回ということで、オペレーションや対策についてスムーズにお客様にご案内できない点があった。また、ギャラリートークや講演会などを行うことができなかったため、市民にもっと「くまのパディントン」について解説ができず表面的な展覧会になってしまったと感じる。感染症対策と美術館としての役割を両立させていくことが今後の課題と考える。

企画展の開催について	仲山計介展 R2.5.19～6.14 コロナの影響により会期短縮 ※R2.4.25～6.14	24 7,000	80 1,915	27%	地域ゆかりの作家を市民に広く紹介するという、浜松市の公立館としての役割を果たすことにつながった。 展示室の壁面を黒布で覆い、作品のみに照明を当てることで、暗闇に作品が浮かび上がる幻想的な展示が実現した。 大きな屏風作品を、広い展示空間でゆとりをもって展示することで、来館者の密を避ける新型コロナウイルス対策の一助もなった。 臨時休館期間中、作品解説や展示風景、学芸員のギャラリートーク等、様々なコンテンツをSNSで発信した。 来館者の写真撮影、SNS発信を許可したことで、ネット上で展覧会の評判が広がった。	会期の短縮に加え、作家本人によるギャラリートーク、専門家による講演会も中止となった。これを補うように、SNS上での情報発信や、メディア(中日新聞・Kmix・Fmharo)露出も増やしたが、コロナ禍の来館者増にはつながらなかった。 美術館のコロナ対策(受付の飛沫防止パネル、ソーシャルディスタンスを確保したベンチの配置、清掃員による消毒の様子の動画)をSNSで発信したが、来館者の回復には効果が薄かった。
	国芳から芳年へ展 R2.9.26～11.8	38 30,000	505 19,179	64%	名古屋市博物館所蔵の国文学者・尾崎久弥と医学者・高木繁のコレクションの中から歌川国芳とその弟子たちの作品150点を紹介した。 見どころの一つである「英名二十八衆句」28枚揃は、歌舞伎などの殺戮の場面を描いた作品であるが、残酷な絵が苦手なお客様は見なくても良いように通路を工夫した。 声優による音声ガイドが用意されたが、新型コロナウイルス感染症防止のため当初中止を考えたが、使い捨てイヤホンの導入などで感染症対策を行い、1400人を超えるお客様にご利用いただいた。	名古屋市博物館のご厚意により、全ての作品の写真撮影が可能となり、好評を得た。一方、シャッター音が不快との意見もあり、今後との課題となった。
	みほとけのキセキ展 R3.3.25～3.31(4.25)	6(28) 25,000	595 3,568	14%	令和2年～3年度の年度を跨ぐ事業であり令和3年度が主となるため、令和3年度事業として報告します。	

②教育普及活動について

・市民の感性を育むため、美術に触れる機会と他者とのつながりを提供します。

	内容	実績(人)	成果	改善点
団体鑑賞について	学校、地域の諸施設等からの団体での来館・鑑賞を受け付ける。	0	※新型コロナウイルス感染防止のため未実施。	
ギャラリートークについて	展覧会担当学芸員や作家等が、展示内容について解説を行う。		新型コロナウイルス感染防止のため、展示室でのギャラリートークは実施できなかったが、仲山計介展ではSNSを活用し学芸員のギャラリートークを発信した。	イベント開催における感染症対策は、今後も必要と思われ、対策を考えていきたい。
講演会について	展覧会の内容に応じた有識者(作家、大学教員、研究者等)の講演を行う。		「国芳から芳年へ展」では、コロナウイルス感染防止のため、講演会の定員を、通常50名程度定員のところを20名程度の定員募集とした。	イベント開催における感染症対策は、今後も必要と思われ、対策を考えていきたい。
ワークショップについて	展覧会の内容に応じた表現活動・鑑賞活動を行う。	0	※新型コロナウイルス感染防止のため未実施。	
出前講座について	学校や諸施設へ出向き、美術館展示作品・所蔵作品に関連した表現・鑑賞活動を行う。	0	※新型コロナウイルス感染防止のため未実施。	

職場体験について	浜松市内の中学生の職場体験を受け入れ、美術館業務を体験してもらう。	0	※新型コロナウイルス感染防止のため未実施。	
----------	-----------------------------------	---	-----------------------	--

③その他施設等について

・様々な人に開かれた美術館とし、施設・設備の充実と健全運営を目指します。

来場者アンケート～ 満足度について	アンケートはパディントン展、館蔵品展、市展、みほとけのキセキ展で実施。		
スタッフ対応 「満足」、「やや満足」と回答したものを計上。	パディントン展・・・93.8%、館蔵品展・・・83.3%、市展・・・80%、みほとけのキセキ展68.3%		
施設満足度 「満足」、「やや満足」と回答したものを計上。	パディントン展・・・91.3%、館蔵品展・・・81.8%、市展・・・80%、みほとけのキセキ展75.5%		
施設に臨むもの	①カフェ58.1% ②常設展示室22.6% ③収蔵品検索コーナー12.5% ④その他6.8%(駐車場・体験コーナー・キッズスペース)		
施設の状況について	浜松市美術館2階収蔵庫SFD交換工事(2台)、浜松市美術館1F小展示室西防火扉引戸鍵取替工事、松市美術館防火扉改修工事、松市美術館防火扉改修工事、浜松市美術館1階展示室ライティングレール取替工事、浜松市美術館1Fピクチャーレール取付修繕工事、高圧気中開閉器(SOG)取替修繕工事、2階小展示ケースフィルム張替修繕工事		
展覧会等の情報発信について	<p>・展覧会毎にポスター掲示やチラシを配布したほか、展覧会共催者によるテレビCM等を活用した情報発信を行った。くまのパディントン展・国芳から芳年へ展・みほとけのキセキ展については、テレビCMによる広報の効果が大きく感じられた。</p> <p>・ポスターは広告媒体の重要なものとなることから、デザインを決める際には担当だけでなく全職員で見やすさやデザインの観点から決定した。</p> <p>・SNSを活用した情報拡散 若年層を取り込むにはツイッターやFacebookが有効と考える。企画会社や作品の借用先と交渉し、来館者にはなるべく作品撮影の機会を与えるようにしている。くまのパディントン展ではキャラクターと写真を撮影できるイベントを企画したほか、みほとけのキセキ展では展示の仏像を撮影可とするなどした。また撮影した写真をSNS投稿した人には抽選で景品をプレゼントするという企画で、情報が必然的に拡散されている。館内にはツイッターやFacebook、InstagramのQRコードを掲示して容易にアクセスしやすくしている。</p> <p>・ツイッターを利用した情報発信 ツイッターでは若年層に興味をもってもらうように柔らかい表現で情報発信している。近年のフォロワー数の伸びも著しい。(参考:8/3 現在のフォロワー数8,058)</p>		

令和2年度 浜松市秋野不矩美術館内部評価

年間の基本コンセプト	総 評
1 特別展では、秋野不矩と同時代に活躍し、新しい日本画の創造を目指すなど秋野不矩と共通性がある日本画家の作品を紹介した。 2 所蔵品展では、本館所蔵作品を中心に展示を行い、秋野不矩の業績を広く紹介した。 3 改修工事を滞りなく実施し、施設の保全に努めた。	令和2年度は、屋根・外壁改修工事により7月3日まで休館するため、当初の予定では特別展を2回、所蔵品展を3回行う予定であった。このうち、2回目の特別展として行う予定であった「石本正展」が、コロナウイルス感染拡大防止の観点から、令和3年度に延期となった。このため、特別展を1回、所蔵品展を4回行うことになった。 特別展「佐藤美術館コレクション 花と緑の日本画展」は、1990年に開催された「国際花と緑の博覧会」で展示された「花と緑・日本画美術館」の作品を紹介するもので、「花鳥画」などに対する日本人の持つ美意識を再認識させる機会として受け止められた。また、所蔵品展では、秋野画伯の画業を多くの人に見てもらうことができた。 工事については、7月までに屋根・外壁改修工事を完成させることができ、また令和3年度にかけて照明機器のLED化を進め、適正な作品保護環境の整備を行うことができた。

①展覧会について

・優れた美術を鑑賞できる展覧会を開催し、来館者の裾野を広げます。

	展覧会名	開催日数(日) 目標(人)	平均(人/日) 実績(人)	達成率	成果	改善点
平常展の開催について	秋野不矩 色ふる筆の跡Ⅰ ～動と静の群緑～ 2020.8.29～2020.10.18 秋野不矩 色ふる筆の跡Ⅱ ～安らかな黒白～ 2020.11.10～2020.12.13 秋野不矩 色ふる筆の跡Ⅲ ～純潔の赤～ 2020.12.19～2021.2.14 秋野不矩 色ふる筆の跡Ⅳ ～黄金の街 インド～ 2021.3.2～2021.3.21	136日 7,000人	65人/日 8,850人	126%	秋野画伯は、常日頃から絵具の特質を正しくとらえて使用しており、岩絵具には徹底的にこだわりを持った画家であった。 令和2年度は、絵具の色という観点から秋野画伯の画業を見るユニークな展示を行った。 第1回は青や緑の系統の色にまとめ上げられた作品、第2回は秋野画伯が好んだ胡粉の白と黒のコントラストを楽しめる作品、第3回はインド渡航初期の赤を基調とした作品、第4回はインドの生活・文化を描くために金箔を使っている作品、というように各回によって主題を変え、色からアプローチすることによって、秋野画伯の筆の跡を追う展示となった。 当初は3回で行う予定だったが、特別展が延期となって4回行うこととなり、来場者も目標を上回って、しっかりと秋野画伯の画業を広く紹介することができた。	今回は、ユニークな視点から所蔵品展を開催することができたが、秋野不矩美術館が開館して20年を超えた現在、限られた収蔵作品による展覧会のマンネリ化は課題である。所蔵品展の開催方法は常に工夫が求められている。 今後、所蔵品展の中でも他館からの作品を紹介するなど、新しい試みを取り入れていき、また、秋野不矩についての調査研究を今後も継続的にを行い、その成果を展覧会の場で発表する等の工夫を行いたい。
特別展の開催について	佐藤美術館コレクション 花と緑の日本画展 2020.7.4～2020.8.23	45日 5,000人	155人/日 6,960人	139%	平成2年、大阪の鶴見緑地で開催された「国際花と緑の博覧会」は、人と自然が調和した21世紀の創造をテーマにしており、会場内で展示された「花と緑・日本画美術館」は、当時の日本画家50名の新作が一堂に会し話題を呼んだ。 その「花と緑」をテーマにして各画家が競い合った力作群を展示し、再度日本人としての美意識を確認することができる展覧会を開催した。 目標を上回る来館者があり、秋野画伯の「讚華」をはじめとする日本画作品を多く紹介することができた。	秋野画伯を始め、片岡球子など多くの日本画家の作品が並び、好評を得た。 一個人の足跡を追う展覧会もちろん有意義であるが、こうした幅広い画家による展覧会も多くの集客が可能であることを知ることができた。

②教育普及活動について

・市民の感性を育むため、美術に触れる機会と他者とのつながりを提供します。

	内容	実績(人)	成果	改善点
団体鑑賞について	学校、地域の諸施設等からの団体での来館・鑑賞を受け付ける。	0	随時受付をしているが、昨年は観光の団体が3回(9人、9人、30人)利用があったのみで、学校や地域の諸施設等からの団体申込はなかった。コロナウイルス感染拡大防止のため、やむを得ないものであったと思われる。	今後は、学校などにPRを行い、団体利用だけでなく、児童・生徒個々でも絵画に親しんでもらえるようにしていきたい。
ワークショップについて	展覧会の内容に応じた表現活動・鑑賞活動を行う。	0	年度当初は、ワークショップの開催を計画していたが、コロナウイルス感染拡大防止のため、事業中止となった。中止は残念であったが、次年度以降の開催を予定。	

③その他施設等について

・様々な人に開かれた美術館とし、施設・設備の充実と健全運営を目指します。

来場者アンケート～ 満足度について		
スタッフ対応	「満足」、「やや満足」と回答したものを計上。	アンケートは所蔵品展のみ実施。特別展は、コロナウイルス感染拡大防止のため実施せず。 ・・・92%
施設満足度	「満足」、「やや満足」と回答したものを計上。	・・・98%
施設に臨むもの		カフェ・・・51%、常設展示・・・28%、図書コーナー・・・17%
施設の状況について		
屋根・外壁改修工事	R元.12.4～R2.5.29	屋根の鉄平石の不良個所を交換及び屋根の防水加工、外壁の点検及び不良個所補修
照明設備改修工事	R2.11.6～R3.5.7	1階(43台)及び2階(30台)の展示室蛍光灯のLED化
建物修繕	年間を通じて正面雨樋修繕など合計4件の建物修繕を行った。	
展覧会等の情報発信について		
・特別展においてはポスターやチラシを制作し、他美術館や市内施設、学校等に配布した。また展覧会共催者による新聞告知やテレビCM等で展覧会情報を発信した。		
・HP上で年間スケジュールと直近2か月分の開館日情報の詳細を掲載した。		